

# 第 1 回検討会でいただいた 主なご意見と対応案

## 本検討会全体に関するご意見

- 本検討会で検討する情報は、富士山だけを想定したものではなく「全国の火山を対象に」しているということを資料中で強調していただきたい。
- 避難が必要になるような大量降灰に対して、避難指示の発令のトリガーとなる情報や対象範囲の絞りこみのための降灰予報の高度化を検討いただきたい。
- 降灰は非常にまれな事象であるから、現象や被害の様相を丁寧に分かりやすく伝える情報にしてほしい。

⇒ご指摘いただいた点を踏まえて検討を行うとともに、報告書のとりまとめにおいても留意いたします。

- 火山噴火のように複雑で見通しがきかない現象に対しては、できるだけシンプルな情報を設計することが大事である。降灰現象だけを切り離して情報を検討するのではなく、「噴火警報」なども含め火山噴火現象全体の情報体系を整理・検討してもよいのではないか。

⇒資料3に噴火前後に発表する情報のイメージ案を整理しましたのでご意見をいただけますと幸いです。

## 検討課題1「降灰の厚さに応じた呼びかけ内容と警報化の要否」

## 検討課題2「大規模噴火発生時の広域降灰への防災対応のトリガーとなる情報のあり方」

## 検討課題3「大規模噴火発生時の噴火の推移に応じた降灰の見通しの情報のあり方」に関するご意見

### <降灰の警報化の要否や考え方に関するご意見>

- 降灰予測の精度は高くなく、火砕流等と比べて現象の切迫度が低く時間的猶予があるので、放送では、命を守るための呼びかけが一段落した後に伝える方が効果的で混乱を招かないと考える。降灰については、警報よりも、解説情報で伝えるのが良いのではないかと考える。
- 噴火警報と降灰警報が共存することで混乱を招く可能性があるため、現象や被害の様相を丁寧に分かりやすく伝える情報にしてほしい。
- 噴火によって危険なエリアと火山灰によって危険なエリアは違うが、インターネットメディアやスマートフォンアプリでは、場所に応じた警報を直接伝えることができる。ただし、頻度の少ない降灰の警報を国民に理解してもらうことには課題があり、どこまで効果があるかは疑問。自治体、鉄道、道路管理者等には役立ててもらえるだろう。
- 降灰は、風向きによって被害状況が異なるうえ、噴火発生から被害が生じるまでにタイムラグがあるので、噴火警戒レベルを判断基準とすることは難しい。シンプルで分かりやすい情報が専門性の高い気象庁から発信されることが、速やかな初動体制の構築や住民に正しい行動を促す上で効果的と思われるため、注意報や警報の導入を検討いただきたい。
- 降灰の警報化には賛成。降灰により広域で交通が麻痺する前に、避難や防災対応のトリガーとなる端的な情報が必要である。富士山が噴火したときには、近隣では火砕流や溶岩流などが生じており、降灰に意識が行かないので、首都圏向けに降灰の影響の可能性が大きいことを知らせるために、噴火警報とは別に降灰の警報を設ける意味がある。国民にとって降灰はあまり経験のない事象であり、対応の意識が無いからこそ、情報を伝えるためのツールとして警報を作っていく必要がある。
- 宝永クラスの噴火が発生すれば、噴煙が最高高度に到達するまでに5～10分、そこから20分～1時間程度で東京では降灰が生じ、高度1万mに達する噴煙により真っ暗になって全てが停止してしまうので、速やかに降灰の警報を出す必要がある。
- 2週間継続した宝永噴火の推移だけを注目のだけでなく、1日程度で宝永噴火と同程度の噴出量となることも想定して、降灰の警報を出すかどうかを考えないといけない。
- 社会への影響が大きいので、情報で降灰の警戒を呼び掛けるにあたっては、いつまで警戒してもらうのか、どうやって警戒を収めるのか、技術的にそうした情報を出せる水準にあるのかを含め、慎重に考えていかないとはいえない。

⇒資料3に降灰の警報の考え方、情報文のイメージを整理しましたのでご意見をいただけますと幸いです。

## <降灰の量の区分、表現に関するご意見>

- いつ降り始めるかということ、避難対応の基準となる降灰の厚さ30cmの値は重要だが、それ以下の細かい降灰量はあまり強い意味合いは持たない。降灰の見通しの情報は、細かい情報よりも、対応をとってほしいことをしっかり伝えられるように設計することが重要。
- 降灰量に応じて例えば1～5の降灰レベルを設ければ、どれくらい降るのかを理解していなくても、レベル5のときには非常に大変な状況にあると理解できるのではないか。
- 降灰量の表現について、「多量」の定義は人によってまちまちなので、より分かりやすい発信内容を検討いただきたい。
- 降灰に関する定性的・定量的な表現を表記するときには「厚さ」ではなく、比較的慣れ親しんでいる雨や雪の情報の表現に寄せても良いのではないか。

⇒資料3に降灰量に応じた呼びかけを整理しましたのでご意見をいただけますと幸いです。

## <降灰予測の不確実性の伝え方に関するご意見>

- 降灰の状況をリアルタイムで把握することが難しいため、予測を軸足にした情報であるということをしっかり説明する必要がある。
- 今後の噴火の噴出量や継続時間は分からないので、降灰の見通しは予測出来るものではないということをきちんと伝えることが重要。
- 降灰予測情報を伝えるにあたっては、予測の不確実性を説明できるようにする必要があるので、不確実性の幅を次回以降示してもらいたい。

⇒資料3に情報文のイメージ等を整理するとともに、参考資料に「降灰予測計算の不確実性」をまとめましたのでご意見をいただけますと幸いです。

## <気象情報の伝え方に関するご意見>

- 雨によって被害の様相が変わるので気象情報と合わせて伝えることも意識してほしい。

⇒記者会見や情報の解説の場で、気象情報と合わせて説明することとし、報告書にもその旨記載いたします。

## 検討課題4「噴火前に提供する降灰に関する情報のあり方」に関するご意見

- 高齢者などの避難については噴火後からでは間に合わない可能性があるため、噴火の前から対応のトリガーとなる情報が必要ではないか。
- 噴火前に噴火様式を予測することは困難なので、降灰に関して事前に数十万の住民に避難を呼び掛けることは困難。
- 噴火直後は火山灰の情報以外にも伝えるべき緊急情報が大量にあるので、噴火前する前の段階から、噴火が発生した場合には広域に降灰の影響が及び道路交通や鉄道に障害が生じ得るということを丁寧に伝えることが必要である。

⇒ご指摘の点も踏まえて、資料2に噴火前に提供する降灰予測情報に関する課題と論点等を整理しましたのでご意見をいただけますと幸いです。